

# 子どもの主体的な活動を生み出す環境をつくる

—子どものつぶやきを手がかりとして—

Create an environment that bring about the independent activity of the child

—The mutter of the child as a clue—

坪井敏純<sup>\*</sup>・松元直美<sup>\*\*</sup>

Toshisumi Tsuboi, Naomi Matsumoto

<sup>\*</sup>鹿児島女子短期大学      <sup>\*\*</sup>清水保育園<sup>注1)</sup>

抄録：子どもの主体的な遊びを促すために二つの試みが行われた。一つは遊び環境の見直しである。そこでは子どもの安全を確保しながら、自然と触れ合うことができる環境を工夫するとともに、子ども自身が興味や関心を持った活動が展開できるように保育環境を整えることであった。もう一点は子どもの「つぶやき」を集めることである。何気ない子どもの言葉の中にある想いや願いを受け止め、それに保育士が寄り添いながら、保育を実践し、その振り返りから、保育を見直す試みが行われた。その結果、子どもの遊びは広がり、主体的に活動する子どもたちの様子が現れてきた。さらに「つぶやき」を通して職員間で子どもの情報が共有されることで、子ども理解が促され、協働的な職場環境になったことは見逃せない成果であった。

**Key words**：つぶやき、子どもの主体性、保育環境、自然、協働性

## 1. 本研究について

この論文は2016年2月20日に行われた鹿児島市保育園協会主催の実践論文発表研修会において発表<sup>注2)</sup>されたものに、松元直美<sup>注3)</sup>と坪井敏純が加筆し、あらためて分析を行い、まとめ直したものである。研修会で発表された論文は、保育園の中で本当に子どもたちが主体的に生活し、遊んでいるのか、保育士の意図や願いを優先した保育になっているのではないかというという振り返りから生まれたものである。保育の実践では保育環境を見直し、子どもの声（思いや願い）を聞いて受け止め、保育の見直しを行った結果を報告したものであった。なお文中の囲いの中の文章は研修会で発表された論文を引用した箇所である。

## 2. はじめに

今日の遊びを楽しみに生き活きとした表情で「おはよう！」と、元気に登園する子どもたち。保育園で生活の大半を過ごす子どもたちが『遊び』の中から得るものは計り知れない。「遊びを通した様々な経験の中で、喜びや感動を味わってほしい」という気持ちはあるが、実際には行事に向けての取り組みや準備に追われ、「〇〇ができるようになって欲しい」「〇〇を経験してほしい」という思いから、保育士主体の保育に偏りがちであった。子どもたちにじっくり向き合えていなかったり、子どもは保育士が設定した環境や遊びの中で遊ぶことが多かったりする。

このような問題が提起された背景を少し理解しておく必要がある。ここで問題とされる「子ども主体の保育」は、保育の原点でもあり、保育を振り返った時、多くの園に共通のテーマではあるが、本園特有の課題が存在する。その点を松元（著者）は、次のように述べている。

「社会事業協会は保育園・児童発達支援施設・乳児院等複数の施設をもつ社会福祉法人である。専門的な学びの機会も多く、職員の異動があり出会いが豊富であることから、学びや気づきが得られる環境にある。その一方で、他園から転勤してきて、経験年数も様々な保育士・栄養士が、縁があり共に働く仲間を尊重し、理解し合いながら、協力して取り組んでいく

ことが求められる。そのためには、園の保育理念を共有することに加えて、職員個々の考えを理解すること、園の子どもたちや保護者・地域を知り、職員の想いを共有しチームワークをもって取り組むことが必要である。

職員一人ひとり、個々が持っているすばらしいものを表に出し、活かし、実現し、本当の意味で、保育の素晴らしさを体感してほしい、この素晴らしい子どもと関わる保育士という仕事を楽しみ、やり甲斐をもってほしいという思いから、K J法を使って、平成27年度新体制で臨む保育についてみんなで考える機会をもった。」

その話し合いは、次のように行われた。

【私たちが描く保育園】

新年度が始まり、今年度の保育をどのように作っていくか、K J法を用いて職員全員で意見を出し合った。「自然に親しむ」「散歩に出かける」「形にはまらない保育」「昔に触れる」など、様々な想いが出されたものをまとめていくと、『子どもたちがのびのびと育ち合う豊かな環境作りを深めること』が見えてきた。

松元（著者）は、この検討会をあらためて、次のようにまとめている。

『子どもたちがのびのびと育ち合う豊かな環境とは』という課題が見えてきた。その中から『子どものやりたいことが生まれる』環境を作り、『大人の都合ではなく、本来のありのままの姿を認めてもらえる』という共通の目標が出てきた。では、それを実現するためには、今の保育の課題は何かを整理すると、次のような点があげられた。

- 今、私たちが作っている環境は保育士目線ではないか？ 子どもの想いや願いが保育士に伝わっていない、あるいは聴いていないのではないか？
  - 行事にむけての取り組みや準備に追われ、保育士主体の保育に偏りがちではないか
  - 保育士が設定した環境や遊びの中で遊ぶことが多く、子どもの主体性が発揮されていないのではないか
  - 子どもにとって安全な環境をつくるために、遊びの提供や環境づくりを工夫している。それが子どもにとってどうなのか
  - 保育の仕事は忙しい。一人一人に合わせた援助と保育の計画・実践・行事への取り組み、保護者支援・・・。
- チームワークが大切。

話し合いでは、『保育理念を共有して、子どもたちのために職員が一体として取り組みたい』『子どもが安全な環境で主体的に遊ぶには？』『日々の業務を協力して取り組み、いかに子どもたちと向き合うか？』『保育士の仕事を楽しみ、子どもたちや保護者にとっての幸せの拠点を目指そう』といった、『みんなで目指す保育』が検討された。これは、一人一人の保育にかける想いを出し合うと共に、同僚の想いも知り、課題を共通理解するという機会となっており、保育園全体の保育の道筋をつけるものであった。

結局、『子ども主体の保育』を職員が全員望んでいたことを確認したことと、それがなぜできないかを検討する作業が行われた。その中で、保育環境が保育士に都合の良い環境ではないのか、子どもがやりたいことができていない環境といえるのかといった疑問が多く出されていることがうかがわれる。

子どもの想いに耳を傾け、環境を変えることで主体的に子どもが取り組める活動を増やしていこうという職員の思いが伝わってくる。」

結論として、実践研究のポイントは次の2点に絞られるとあってよいだろう。

第1点は、子どもたちの主体的な活動を引き出す、豊かな環境づくりである。保育士目線で作った環境ではなく、子どもの主体的な活動を生み出す豊かな環境づくりに取り組み、試行錯誤する中で、子どもの声を聴き、さらにそれが保育士と子どもが一緒になって環境を変えていくという循環によって、より良い保育を目指そうとした。

松元（著者）は、「豊かな環境」は物的にも人的にも豊かであること、子どもの視点を大事にして自然や遊び環境を工夫することにあるをあげているが、豊かであるという意味は、広いとか多いとかという意味ではない。それは高い応答性のある環境を意味し、自然や遊び環境の工夫とは、子どもが主体的に関わり、遊びの深まりや広がりが生まれる環境をつくる試みである。

第2点は、子どもの声を聴くことである。その取り組みとして、子どもの「つぶやき」を集めて、子どもたちが思っていること、考えていることに耳を傾けることである。「つぶやき」は幼児が考えていること感じたことを独りごとの形で、私

私たちは知ることができる。「つぶやき」は大人に伝えようという意思を持ったものもあるが、子どもの物事のとらえ方などを知る絶好の情報ともいえる。

子どもの「つぶやき」は、大変面白いことから多くの幼稚園や保育園で集められているが、幼児期を対象にした研究では、下山田裕彦・浅場慶夫（1988）は「つぶやき」と保育者の働きかけとの関係を詳しく分析を行っている。言語発達から見ると、小林・山崎・青木（2004）は「つぶやきはその長短に関わらず、心に刻まれたものを自分の力で表現した言葉であり、その子の感動、心が動いた一瞬であるとともに成長の瞬間である。その段階を共に感じられる喜びは幸せである。」と述べている。

米田（2003）は、「つぶやき」の「可笑しさ」（笑い）に注目し、子どもが周りの世界をどう認識しているかといった考察を詳細に行っている。さらに増田（2009）「つぶやき」を聞きとることは保育士の成長を促す貴重な体験であることを示唆している。

さらに京都府立舞鶴支援学校（2014）では小学校の現場で、子どもの「つぶやき」を見逃さず、指導に生かした実践を行っている。また東條（2010）は「分からない」という「つぶやき」を分析して、中学校の英語指導に生かしている。

「つぶやき」は会話のように聴く相手がいるわけではないことから、いわばその内容に責任を持つ必要はないし、その意味で聴き手の反応を考慮することもない。いわば子どもの本当の気持ちを、私たちが受け取ることができることから、「子どもの気持ち」を聴いて、保育環境を改善するヒントを得ることが今回の一つの目的である。

この二つの取り組みは、同時進行で行われることになる。

### 3. 「つぶやき」を集める・「つぶやき」を聴く

（略）子どもの声を聴くこと、子どもと同じ目線で過ごすことを第一に考え、「つぶやきメモボックス」を作り、ここから子どもたちのどんな言葉や想いが飛び出すのか楽しみにしながら、「つぶやき」を受け取っては、ボックス（写真1）に入れていくことにした。

#### （1）子どもの「つぶやき」を聞こう！

子どもの発する言葉やしぐさに着目し心の動きや見えてくる背景を感じ取っていこう！

- ・大人になった私たちにはない魅力、子どもの感性に近づきたい
- ・子どもの心は子どもしかわからない 子どもが答えを知っている
- ・普段のかかわりから子どもの「つぶやき」を受け取って聞かせてもらうこと。まずはそこからはじめてみようというきっかけ。

#### （2）子どもの「つぶやき」を意識する園生活となった

職員が「つぶやき」を集める過程で、それを職員同士が伝えあい、それを一緒に楽しみあい、そこからお互いが学びあい、子ども理解の深まりと保育の楽しさを共有するということが行われるようになった。



写真1 使用したつぶやきボックス

では、集められた、「つぶやき」の一部を紹介する。

《つぶやき①》

金柑の枝にアゲハチョウの幼虫を見つけた。門壁には、雨に打たれて濡れたさなぎが脱皮できないでいた。大声で仲間を呼ぶYちゃん。自分の傘で雨をよけ、小さな声で「頑張れ！頑張れ！」と繰り返していた。翌日、朝一番に「ちょうちょさん、大丈夫？」と集まってくる子どもたち。力尽きた蝶の姿に眉をハの字にして見つめ、側から離れない。

「ちょうちょさん、かわいそう。お墓作ってあげよう。」と、決心のついた表情でつぶやいた。場所を子どもたちが決め、土に埋める（写真2）。虫の命が教えてくれたもの、子どもの心にも刻まれた。図鑑や絵本を通して認識していたものを実際に目で見たり、触ったり実体験することで命の尊さを身をもって感じていた。

《つぶやき②》

給食時間の出来事。貝殻の形をしたマカロニをそっと箸でつまみ、じっと見つめていた四歳児クラスのSくん。「かわいそうになっちゃう。」の一言に担任が尋ねると、「セミの抜け殻のお尻みたい。」と。クラスの子どもたちは、「お尻」というワードに爆笑する。「かわいそう」と言っている子どもの「つぶやき」に気付き、声を掛けた保育士。藤棚にセミの抜け殻を見つけ、バケツをひっくり返して踏み台にし、必死に手を伸ばして取っていたSくんの姿を思い出し、微笑ましくなった。

《つぶやき③》

花壇に生えているクロガネモチの木に両手を広げ抱きつく一歳児クラスのAちゃん（写真3）。木の膨らみに「チュウチュウ」と吸い付く。他の子も「おっぱいあった！」と、集まってくる。木のこぶが子ども目線では「おっぱい」に見え、母親を連想した様子。以前「おっぱい」という絵本を喜び、何度も見ていたことを思い出した。子どもの発想、想像力の豊かさ、子どもにとって母親の母性に対する特別な想いを感じた。大好きなクロガネモチの樹がお母さんになった瞬間であった。

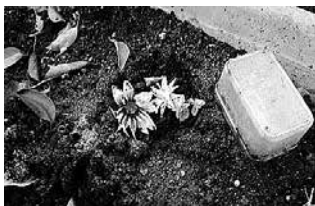


写真2 ちょうちょのお墓



写真3 クロガネモチにだきつく

《つぶやき④》

絵の具遊びをしていた時の出来事。ちょんちょんと筆を付け、白い紙が鮮やかに染まっていく。そんな中、聞かれた2歳児クラスのMちゃんの「つぶやき」。「あっ、ピンクがお友だちになった！（写真4）」。色が混ざり合う様子を『お友だち』になるという発想に担当保育士は感動する。4月の頃の本児の姿を見てきたからこそ、その気付きの変化に成長を感じ、お迎えに来たお母さんに伝え、共に喜び合った。

《つぶやき⑤》

雪が降り積り、子どもたちは大喜びで雪合戦や雪だるま作りを楽しんだ。そんな中、「みんなのクローバー、大丈夫かな。」と慌てた様子でクローバーの上に積もった雪をかき分ける女児の姿。次第にその輪が広がる。雪の下で変わらず姿を見せたクローバーに「良かった。生きてた！」と安心し、喜び合う子どもたち（写真5）。みんなで種を撒いたクローバーはいつの間にか子どもたちにとって大切な存在になっていた。命の大切さは言わずとも学んでいる。



写真4 色がお友達になった



写真5 生きていたクローバー

《つぶやき⑥》

ミニトマトを皆で観察していると、小さなミニトマトを見つけた女の子。「赤ちゃんトマト生きているね」

《つぶやき⑦》

大きなドラえもののビニール人形に空気を入れていると、子どもたちから聞こえてきた声。「空気入れたら本物になるの？」

次は、保護者から届いた「つぶやき」である。

《つぶやき⑧》

お尻を痛がっていた娘に心配して声をかけたら、「しっぽが痛いの」。お母さんの一言「うちの子、しっぽがあるみたいです」

《つぶやき⑨》

3歳の息子と買い物に行って、気に入った服を試着室で着替え、購入した服を着て帰ったら、上から下までじっと見つめて、「お母さん、うんこ漏らしたの？」

このような「つぶやき」やエピソードから、子どもは何に関心があるのかがわかった事例、環境を変えたことで子どもの行動の変化に結びついた事例や保育士の幼児理解が深まり保育への取り組む姿勢の変化につながるものなどを見ることができる。

もちろんこれまでの保育の中でも、多くの「つぶやき」はあったはずであるが、見落とされていたかもしれない「つぶやき」に耳を傾けることで、保育を見直す機会となっていることは間違いないようである。

保育の中で子どものつぶやいた言葉、あるいは話しかけてきた言葉を、そのつど書き留めて「つぶやきボックス」に入れていく。その場面を写真に撮っておくこともある。ボックスに入れられた「つぶやき」は職員会議で話題にしたり、午睡の時間あるいは、ちょっとした時間に伝え合うなど、「つぶやき」の話題は保育園全体のコミュニケーションを生み出していくことになる。

#### 4. 豊かな環境をつくる；充実した遊びの環境作り

○子どもが自分で選び、遊びを生み出せる環境を、子どもと一緒に作っていく。

限られた敷地に固定遊具が並ぶ。朝の自由遊びでは保育士が選んだ玩具が出され、安全に遊べるよう見守りながらの保育。私たちの目指す豊かな環境とはやや矛盾し違和感を覚えた。子どもが自分で選び、遊びを生み出せる環境であるか？保育士同士の気付きから今すぐ出来ることに取り掛かった。自然の感触に触れさせたいという思いから、園庭にクローバーの種を蒔き、虫探し出来るコーナーを作る（写真6）。米作り体験（写真7）やシイタケ栽培も行い、落ち葉や雑草は遊び道具として活かされる（写真8）。廃材も集め、いつでも取り出せるよう手の届く所に置くようにした。（さらに遊具も子どもが自由に取り出せるようにした）



写真6 育ったクローバー



写真7 栽培体験



写真8 葉っぱを使ったままごと

具体的は、特に次のような例が挙げられる。

○子どもが選んでいつでも遊べる環境を作る。

戸外遊びの遊具は倉庫に片付けられていたが、靴を履いて外に出ると子ども達がいつでも自由に遊具を選び、遊べる環境を作った。ままごと道具も子どもが簡単に持ち運びできるものを取り入れ、子どもが思うように組み合わせる遊びの環境づくりを楽しめるようにした。既成の子ども用のおもちゃよりも、日常家庭で使っているものが人気であったことからフライパン、ほうき、しゃもじ、お玉、レジャーシートなどを揃えていった。特に、大家族で使用するような大きな両手鍋が年齢を問わず一番の人気。それはなぜなのか、じっくりと観察してみた。どんぐりや木の実を音が出るように投げ入れたり混ぜてみたり、友達と一緒にジョロで水を何度も運び入れていく。それでもまだまだいっぱいにならず、子ども達は様々な材料を加えながらお玉でまぜ合わせ、ごちそうが出来上がっていく。2歳児は大好きなカレー、お兄ちゃんお姉ちゃんたちは、ハンバーグやピザ、誕生日には大きなバースデケーキを作り、家族でお祝いをする姿も。ひっくり返したら太鼓、タイヤの中に入れたらコンロと、子どもの遊び意欲がかきたてられる宝物であったのである。

また、保育士がベランダをほうきで掃いていると、「手伝おうか」と子どもたちが寄ってくる。小さいサイズのほうきを数本さりげなく下げておくと、早速自分たちが作ったままごとの家へ持って行き、レジャーシートにあがった砂を自分たちで掃きはじめた。リアルな生活体験を再現している姿が見られた。まさにそれはこどもたちのお家であった。

○木々とのふれあい。

園の端に立っている大きなくろがねもちの木。ちょうどぞうさん滑り台の裏手にあり全体的には死角になりがちな場所にある。木の根元には花壇がありそこには花が植えられていた。花壇のブロックの段差が危ないので、子どもたちが花壇の中に入っていると、入らないように諭したり、花を踏んでしまった時には「お花かわいそうだね」などと声をかけたりすることもあった。しかし、子どもたちはくろがねもちの木に甘えるように触れたりして離れようとしない。朝登園するとすぐにこの花壇に上ってだんごむし探しが始まっていた。そんな姿から、「ここは、自然を体で感じるができる子どもたちが大好きな場所ではないか？」との思いから、花壇の花々を抜き、土に触れることができるようにしてみた。子どもたちは、花壇に自由に入り、柔らかい土を掘り起こしたり大きな木に両手を広げて抱きついたり、のびのびとした姿が見られるようになった。当初危険だと思っていた足元のブロックも簡単に超えて上手に遊ぶ。死角になりがちな場所も、子どもの大好きな場所であったことから、随時職員の目も届くようになり、新しい遊びの環境となっている。(写真9)。

○昆虫探しに夢中になっている年長児の姿を見て、幼虫図鑑 昆虫図鑑を自由に取り出せる環境をつくる。

見つけた昆虫を調べる姿が多く見られ、休日に捕まえた虫を持ってきて調べる子も出てきた。廊下に本棚を設置し、幼虫や動物、恐竜、宇宙についてなど図鑑を揃えることで、自分たちで好奇心が次々芽生える姿が見られるようになった。(写真10)



写真9 木々とのふれあい



写真10 図鑑で調べる

実際には保育園の園庭はそれほど広くない、いやむしろかなり狭いといってもよい。しかしそこにはクロガネモチの大きな木があり、7～8メートルの金木犀や藤棚もある。プランターなどを利用した野菜づくりは子どもと一緒にやっている。狭い園庭ではあるが、自然に触れる機会を少しでも得られるように工夫し、「発見」する驚きや楽しさを感じられるようにしている。

また、異年齢との関わりも多様であり、そのふれ合いはとても自然なものに思えた。

## 5. まとめと課題

子どもたちが主体となり、遊びを通した経験の中で、喜びや感動を味わってほしいとの思いでできた『つぶやきボックス』。集まった子どもたちのありのままの「つぶやき」は、環境から得られる子どもの発想の豊かさに溢れていた。その背景には、多くの感動や学びがあることに驚かされた。

子どもの「つぶやき」を聴き感することで、私たちは忘れかけていた幼いころの純粋なところを思い出し、「ここが動くこと」を子どもと共に体感することができた。そのことで子どもと向き合う時間が増え、保育の姿勢や環境の作り方も変化していったように思う。

「与える保育」から「選べる保育」へと意識が変わったことで、子どもたちも安心感に包まれていった。自分から楽しさを見つけ、友だちとの関わりも深まり、以前よりも表情豊かに、活き活きと自分を出してくれるようになった。

子どもは今を生き、やわらかい芽をぐんぐん伸ばしていく。それは、その力を引き出す豊かな環境と、傍に寄り添う保育士があってこそだと改めて感じる。

「つぶやき」ボックスを作ったことで、職員間での会話が増え、喜びや感動を共有することが出来、心が通い合う時間が増えていった。

これからも、職員で想いを出し合い、意見を活かすことで同じ方向を見て、保育の計画を練り、実践していきたい。

保育士という仕事のやりがいや楽しさをみんなで感じ合うこともできたことから、今後はこうした子どもの目線や成長をもっと保護者と一緒に分かち合い、共に育んでいけたらと思う。子どもたちの「つぶやき」を大切に、一人ひとりがもっているいいところが輝く『子どもにとっての最善の利益』を得られる保育園を目指したい。

松元（著者）はこの研究を振り返り、もう一度職員がその成果を話しあって、次のようにまとめている。

### (1) 子ども理解の深まり

発見：同僚から「○○ちゃんこんなこと話していた！」という発見

共感：「こんなことがあったんです！！」という共感

共有「どうしてこんなこと言ったのだろう？」「そういえば・・・していたよ！」などのやり取りから、丁寧な子どもの見方と理解が生まれる。

「つぶやき」を集めようという試みは、職員に子どもの言葉に敏感になり、聴こうという姿勢が生まれてきた。子どもは今どんな気持ちなのか、何を感じているのか、何をしたいと思っているのかといった、子どものありのままを受けとめ寄り添うことにつながっていった。

それは今まで気がつかなかった、子どもについての新しい発見であり、それを同僚に話すことで楽しさを共感しあい、「つぶやき」から生まれた保育の課題を、新規採用職員やベテランといった保育経験の差を超えて共有することができた。

## (2) 子どもの思いが伝わる

つぶきは、私たちに話してくれるときもあれば、ひとりごとや友達に話していることもある。聞き方は、さりげなく空気のようなかんで、耳はダンボになっていながらもさりげなく、時に受け答えができないことも、そんな時には無理にコメントしなくてよい～その時の子どもの想いを感じる。

つぶやきを聴くことで、子ども一人ひとりへの理解が深まり、関わりが変わると同時に、子どもの想いが保育に届くようになった。保育士に思いが通じることで、子どもが生き生きし、そこに安心感と信頼感が生まれてくる。

保育士が子どもの声を丁寧に聴くことができたようになったことで、子ども同士の関わりが深くなったように感じる。友達が泣いていると、「どうしたの?」と尋ねて仲立ちをする姿、困っていると、助けてあげる姿が見られるようになった。

何かといえはすぐに保育士に助けを求めている子どもたち。小さな子が物の取り合いをして泣いている時、遊具でうまく遊べない時に「先生! ○○ちゃんが泣いている!」と知らせてきていた子も、今では保育士が泣き声に気づいてその子のところに行こうとしたら、保育士が動くよりも先に年上の子どもたちが「どうしたの?」と駆けつけて、話をきいてあげてよしよしと慰める姿も多く見られるようになる。

これについて松元(著者)は、「子ども自身が自分のしたいことを実現して、自由に遊びを生み出して遊びこむことができるようになったことで、心が安定して豊かになり、友達へも優しくなれたのではないか」と述べている。

子どもの主体的な活動を促すためには、まずは環境に自分のしたことがあるということが、大前提である。そして、そのしたいことを保育士が認め、それを達成するための援助が必要である。このように子どもの気持ちを丁寧に聴くという保育士の姿勢が信頼関係を深めるとともに、子どもが自分で考えるという意欲や態度を促すことになる。

ところで、領域「人間関係」の内容に「①安心できる保育士等との関係の下で、身近な大人や友達に関心を持ち、模倣して遊んだり、親しみを持って自ら関わろうとする」とあり、指針の解説の中に「・・・子どもは、特定の保育士等への安心感を基盤として、徐々に人間関係を広げていきます。」と述べられている。また、幼稚園教育要領解説では領域「人間関係」の内容「(10) 友達とのかかわりを深め、思いやりをもつ。」のところで、「・・・また、肯定的な気分のあるときの方が他者に対して思いやりのある行動をしやすいため、教師や友達に受け入れられ、自分が発揮されていることも必要である。」と指摘している。本研究はまさにこれを実践したものといえるであろう。つまり前述したように「つぶやきを聴くことで、子ども一人ひとりへの理解が深まり、関わりが変わると同時に、子どもの想いが保育に届くようになった。保育士に思いが通じることで、子どもが生き生きし、そこに安心感と信頼感が生まれてくる。」「保育者が子どもの声を丁寧に聴くことができたことで、子ども同士の関わりが深くなったように感じる。」「子ども自身が自分のしたいことを実現して、自由に遊びを生み出して遊びこむことができるようになったことで、心が安定して豊かになり、友達へも優しくなれたのではないか」といった松元(著者)の考察は、保育士と子どもとの関わりの変化が、子どもの主体性を生み出し、仲間関係の深まりを導いた可能性を示唆するものである。

## (3) 保育の深まり

### 1) 幼児理解

- ・ 今まで自分が気付けていなかったことにも気付けてきたように感じる。小さい虫の事など、子どもが教えてくれた。
- ・ 図鑑を、子どもの目の高さにだれでもいつでもとれるように置く。「何ていう名前?」自然に調べるようになり、興味が広がり、あそびが広がる。取り出せるところにあることが大事。
- ・ 先生たちが、共感しあって子どもたちを見守っている雰囲気が日常になり、園の雰囲気になっている。それを子どもたちや保護者が感じてくれているようだ。
- ・ 職員が共感することが日常になった。そのことが子どもへの相乗効果にも繋がり生き生きとした保育が展開されるようになった。
- ・ 子どもと共にあること、「つぶやき」に耳を傾けることが、保育にワクワク感を生み出した。何気なく聞いていた子どもの言葉ひとつひとつに耳を傾けるようになった。そしてどうして、なぜだろうとその言葉からその子の日頃の姿と合わせて、より子どもの理解につながっていく
- ・ 保護者につぶやきを話すととても嬉しそう。保育園で生まれたつぶやきの背景が家庭にあり、そこを保護者とたしかめあって納得したり笑ったりすることもある。家族に話すつぶやきも保育園の体験が元になっていたりして、楽しい。



(12月の生活発表会の幕間で子どものつぶやきを紹介したり、おたよりに掲載したりする。)

## 2) 職員間のコミュニケーション

- ・ 保育士同士のコミュニケーションも充実。メモした「つぶやき」を読み返してみたり、撮った画像を見せ合って、その時の子どものしぐさ、表情、感覚などを共有する。
- ・ 職員会や行事の反省会においても、子どもの言葉やしぐさについての話題が多くなった。
- ・ (「つぶやき」は) みんなで話せる話題であり、一つの話題で明るい笑いが生まれてくる。職員で共有する「こどものじかん」は、楽しい時間となった

松元(著者)は、このような職員の意見をまとめて、次のように述べている。

「この取り組みのきっかけは、『私たちがしている保育は、本当に子どもたちが主体となって遊んでいるのか？保育士主体ではないか？それを知るために、子どもの声を聴かせてもらおう！子どもの声に耳を傾けよう！』という思いであった。

それまで保育士目線に偏りがちであった遊びの環境設定から、子どものつぶやきを楽しみに受けとめる日常となり、子どもが好きな物・好きな場所などを選んで遊びを生み出す環境へと変化した。

子どもの素晴らしい感性は私たちに届いた。今まで私たちが気づけていなかった子どもの視点を感じることで見えてきたもの、心動かされたものから、私たちの行動が変わり、言葉が変わり、環境が変化した。そして今、子どもたちは、『これしていい？』から『〇〇しよう！』『いいね！』という言葉に変化してきている。

また、つぶやきを職員間で伝え合うときは、先輩・後輩の上下関係ではなく全職員が同じ目の高さにあり、笑いあふれる楽しみの時間となっていた。このことがきっかけとなり、感じたことを話し合えるよい雰囲気が作られ、職員のチームワークにも繋がったことを感じる。

子どもの安全を守る環境づくりはとても大切なことであるが、それは安全を守る為に、子どもの遊びの環境を制限することではない。子どものつぶやきを受け取るようになってから、職員の子どもの理解が深まり、個々の育ちやその行動を予測し、より欲求を受け取れるようになったように感じる。

子どもが冒険心を持って様々なことにチャレンジした時に、少々危険だと感じたことも、単に『危ないからやめようね』と注意するのではなく、欲求を認め、見守り、体験させる機会を優先し、危険なことには、それがなぜ危ないのかを一緒に考え、子どもがしたかった欲求を遊びの環境づくりのヒントにする視点も生まれたように思う。ここから生まれたタイヤ遊びや木登りは、今でも子どもたちの大好きな遊びのひとつとなっている。また、つぶやきによって共有した保育士の子どもの理解は、保育中の子どもの丁寧な見守りや連携にも繋がっている。

ありのままの自分を受けとめ近くで見守ってしてくれる保育士の存在は、子どもの探究心や好奇心、自尊心を育み、心満たされる遊びの環境を生み出した。これは子どもにとって安心・安全な環境が保障されているということではないだろうか。」

危険性の問題については、保育所保育指針の領域「健康」の内容⑨では、「危険な場所や災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。」とあり、その解説には「・・・子どもの遊びや行動を狭めることなく、子どもが保育士等や友達と一緒に行動しながら、危険な場所や遊び方を知り、考えながら行動していくことが大切です。」という指導・援助の留意点が記載されている。

一般的な議論として、子どもの安全を第一に考えた結果、その制約によって子どもの生き生きとした姿が見られなくなったり、あるいは保育士の危険であるという判断が、子ども自身が危険性を判断する機会を奪ってしまうことが考えられる。また子どもがトラブルを起こさないように、事前に大人が制約を作ることで、「自分で考え自分で行動する」という主体性が育ちにくなり、いつも子どもは大人に許可をもらいに来るという態度が形成されてしまう恐れがあることに留意すべきであろう。

松元(著者)が指摘したもうひとつは、保護者との関わりであった。

## 3) 保護者とのコミュニケーション

もう一つ重要な変化は、保護者との楽しいコミュニケーションが生まれたことである。保育士は「保護者への指導」という役割を担っているが、子どもの成長を喜び合うという保育士の態度は欠かせないものである。

保育士から保護者に渡される「つぶやき」が子どもの楽しい話題となり、逆に保護者から子どもとのエピソードの中で発

せられた楽しい「つぶやき」は、コミュニケーションのきっかけともなっている。事例に示した「つぶやき⑪と⑫」は、まさにそのような場面である。

松元（著者）はあらためて最後に、次のような感想を付け加えている。

「環境づくりが変化しただけでなく、保育士の心もちが変化した。子どもの感覚に目を、心を向けて、その世界を感じさせてもらうという、保育士の子どもを尊重する思いこそが子どもの最善の利益につながることを実感している。

子どもに寄り添い、つぶやきを聴くことで心動かされたこと、子どもから教えられたこと、見えてきたことがたくさんあった。いま改めて子どもの素晴らしさを職員全員で感じている。

子どものつぶやきを保護者に伝えたと、笑顔がほころぶ。家庭では見ることのできなかったわが子の姿を見ることができたように、愛おしさでいっぱいになった笑顔に会える。私たちは子どもたちが大好きな家族の愛を感じながら、また子どもに向き合う。

ありがとうこどもたち！どんなに社会が変わっても子どもは変わらない。これからも私たちは子どもを尊重し、その声を聴き、心を感じることに、この想いをいつまでも持ち続けていたい。そうすることで子どもがあらまの姿で主体として輝く保育が実現し、私たち「保育士」の仕事も楽しく充実し、子どもと共に在るこの人生が素晴らしいものとなることだろう。」

この研究は、子どもがもっと楽しく遊べる、生活できる環境を作りたいというところから始まっており、それは保育士たちの願いでもあるし、保育士の仕事の原点でもある。子どもと共にいるという保育士としてのやりがいを感じたいという気持ちがこの研究を支えている。

しかしそこには「子どもの安全」との兼ね合いがジレンマとして立ちはだかっている。子どもの行動を禁止したり、制限したりすることが子どものためだという発想と、逆に保育士の都合によって作った制約ではないだろうかという反省は、おそらくどこの保育園でも迷い、悩みの種といえるかもしれない。

もちろんこの「安全」と「自由」は二者択一のものではないし、優先すべきものは「命の安全」であることは間違いないが、問題は保育士の「過剰な安全」意識が、子どもの主体性の育成を抑制する結果を招いていないかという点にある。

清水保育園の実践は、安全性に配慮しながら、子どもの想いや願いを「つぶやき」から知ること、それを保育に取り入れたり、自然環境を中心に保育環境を見直して、子どもの主体性を育てたいという目的で始められたものである。誤解を恐れずに言えば、その裏にあるものは、もっと楽しい保育がしたい、もっと子どもの笑顔を見たいという保育士の想いや願いであった。

清水保育園の小さな園庭では自然環境を取り入れるといっても、限界があるが、そこには多くの工夫が行われている。松元（著者）が言うように「子どもそのものが自然」であり、自然の持つ包容力、つまりどのような子どもでも関わりを生み出し、応答してくれる、他のものには代えがたい力を自然は持っている。たとえ小さな園庭でも、保育にかかわる職員が自然の大切さを認識し、子どもと一緒にしかかわる姿勢があれば工夫次第で乗り越えられる部分は多いということをこの研究は示している。

さらに保育室の環境にも取り組んでいる。自然を探索するための図鑑や本を取り出しやすくし、いつでも見られるようにしている。実際、図鑑を小脇に抱えて走っている子どもを目撃したが、それを皆が囲んで見ているのである。当然、本はかなり傷むことを覚悟しなければならない。

以前は戸外遊びの遊具も倉庫にしまわれて、子どもが自由に取し出すことはできなかったが、それを改善した。そして既成のおもちゃではなく、家庭で実際に使われているような道具などを揃えることで、遊びが充実したものになっていく。

「つぶやき」を取り上げることで、保育士が子どもの声に心を傾け、聴くという姿勢を持つことで、子どもと保育士とのコミュニケーションが生まれ、関係性が深まっていく。そして子どものしたいことがわかり、それを実現するための環境や保育士の援助を考えることが、子どもの主体性を育てていくことにつながっているのである。

さらに「つぶやき」は保育士同士のコミュニケーションを促し、保育を語り合う関係をつくり、協働性を生み出すという結果も見過ごすことができない重要な成果であろう。松元（著者）が最後に指摘しているように、「それこそが保育士の生きがいや、やりがいを生み出す力」となっているのである。

## 注

- 1) 社会福祉法人 鹿児島市社会事業協会 清水保育園
- 2) 清水保育園（発表者 野島加奈；現在は下伊敷保育園）「子どものつぶやきから気づく保育」、平成27年度 鹿児島市保育園協会 実践論文発表研修会、平成28年2月
- 3) 清水保育園 園長

## 引用文献

- 小林洋文・山崎ひと美・青木美智子 2004 幼児の発達と言語表現活動—幼児の「つぶやき」の観察（下）— 長野県短期大学紀要、59、87-99
- 京都府立舞鶴支援学校 2014 生活に生きる学力を育む指導内容・方法の在り方の研究～「読み・書き・算」の視点を持ち、指導改善を重ねる授業研究を通して 平成25年度研究紀要、1-10
- 清水保育園（発表者 野島加奈） 2016 子どものつぶやきから気づく保育 平成27年度 鹿児島市保育園協会 実践論文発表研修会（平成28年2月）
- 下山田裕彦・浅場慶夫 1988 保育者の働きかけと子どもの変容—つぶやきことばを通して 静岡大学教育学部研究報告教科教育学篇、20、137-152
- 東條弘子 2010 中学校英語科文法指導における生徒の「わからない」というつぶやきの分析—ヴィゴツキーによる内言の視座とともに— 東京大学大学院教育学研究科紀要、50、321-243
- 蛭田一美 2011 保育における子どもの『つぶやき』の一考察—学生のひろったつぶやきから— 聖園学園短期大学研究紀要、41、59-72
- 増田修治 2009 保育士の成長と口頭詩の有効性 白梅学園大学短期大学紀要、45、141-156
- 米田恵子 2003 「子どものつぶやき」における笑いについての一考察：朝日新聞「あのね—子どものつぶやき」から 笑い学研究、10、11-19

（平成29年1月18日 受理）